

KSKS

No.117

22.2.28

ゆいゆい通信



編集人 社会福祉法人 寧楽ゆいの会
〒631-0823 奈良市西大寺国見町3-5-5
TEL/FAX 0742-41-6039
URL <http://narayuinokai.or.jp>

定価 1部50円
年間 300円

◆法人からの報告 「事業で区切れない生活支援」 理事長 庄野 千恵子 … 1	◆Reports さわやぎ／きらく舎 … 4 ぼすと／歩っと地活 … 5 D-PORT／こもれび地活 … 6 こもれび就労／ぐっど・たいむ … 7 こもれび生活訓練 … 8
◆News ◇りべるて 生活訓練事業 … 2 ◇市役所コンビニで授産品販売 … 3	◆Thanks 後援会費納入者 … 8
◆Reports ◇ゆいの会 一般専門職員研修 … 3	

事業で区切れない生活支援 複合課題に多機関協働を

コロナの新たな変異株オミクロンの感染拡大と共に新年を迎えました。

デルタ株の収束期にあったのも束の間で、急速に感染拡大して第6波到来となりました。社会生活多方面に影響が出ているのではないかと思います。しかし、街中の人出が少なくなっている印象はありません。オミクロンは感染力が強いものの重症化しにくい、などと伝えられているからでしょうか。それでも基礎疾患などを持つ人にとっては脅威です。感染防止対策を改めて意識し、これまで以上に感染した場合を考えることが多くなります。

さて、法人内では年度末の業務にも追われているところです。各事業所では1年間の事業を振り返り、次年度に向けた方針や予算作成に取り組んでいます。法人としては、近年の通所系事業の利用者の減少傾向について、提供しているサービスが必要とされていないのではないかと、ということから、利用者の実態調査の結果や提供しているサービスの内容や事業形態の在り方などについての検討を次年度も継続します。

これまで精神障がい領域に特化した事業を展開していますが、利用者の生活の困りごとには高齢化や生活のしづらさの複合性などが背景にあり、

いろいろな視点で相談を受けることが必要になっていきます。相談事業や訪問型支援においては、介護領域から精神障がいに関する相談や協力を求められたり、引きこもりについての支援機関からの相談や協力要請などがあります。障がい認定の有無にかかわらず、相談は福祉サービスに繋ぐものばかりではないようです。生活の支援は「支援する・される」の一方向ではなく支援関係の中で利用者が変わっていくことで支援内容も変化していきます。福祉サービスの枠では区切ることができない生活支援ですが、「どのように暮らしたいか」が関わりの中で変わることもあり、就労支援や医療支援も含めて他領域との連携・協働作業も必要です。

事業形態で区切ることができない生活支援をどのように行なうのか、検討しつつ事業を実践していきたいと思います。

今年も皆様のご支援ご協力をよろしくお願い致します。
(庄野千恵子)



『ピア（助け合い）の文化作っていききたい』 りべるて 生活訓練事業

本人の「やりたいこと」しながら ゆっくり外へ

NPO法人「あず」の多機能事業所りべるて(奈良市西大寺赤田町)では2019年4月から訪問型の生活訓練事業を始めました(2020年8月号参照)。開始からもうすぐ2年になる訪問支援の今までとこれからについて、職員の田村亮子さんに話を聴きました。

この事業は、それまで通所の事業所に通っていたが来られなくなり引きこもっている人などへのアウトリーチを、どんな形でしたらやりやすいかを考えて始めました。すでに行なっていた通所型の生活訓練事業に訪問型を追加することで、既存の建物や人員を使って訪問型のサービスを増やすことができました。

今、生活訓練の利用登録者は20人、その内通所もできるのは5~6人で、あとは訪問支援だけの利用です。利用者のニーズは「引っ越しの準備」「ハローワークに行きたい」「プラネタリウムに行きたい」「DVDを一緒に見る」など多種多様ですが、田村さんは「支援者のペースではなく、可能な範囲で本人のペースで寄り添い、外に出るタイミングを探っている」と話します。ただ、生活訓練は利用期限が原則2年と決められています。

「家族からの相談でこのサービスを使い始めた人、訪問を受け入れるのがやっと、という人も少な

くない。なかなか外に出られない精神障がいの人たちの中で、私が月数回訪問して2年でどこかに繋がる人は少ない。また、私たちのような専門家だけが行なう支援に限界も感じている」と言います。

「しんどい時はお互いさま」 の助け合い 形にできたら

そんな中で、「これからは当事者同士の助け合いの力を生かした取り組みをしていきたい」という展望も持っています。

訪問支援の時に他の利用者が一緒に訪問する活動は立ち上げ当初から続けています。訪問を受ける人が「一緒に来ていい」と言ってくれた時に行ないます。同行訪問を受け入れてくれる人は少数で、以前通所していた時に顔見知りになっている場合が多いです。同行しているメンバーもまだ限られていますが、そのうちの1人、井澤さんは「自分は億劫じゃないし、予定が合えば行っても構わない。何かできればと考えている」と話します。

田村さんは、「りべるてでは、『当事者研究』などを続け、専門家の支援だけではなく、当事者同士の支え合いを大切に運営しているつもりだったが、ピアの文化が全体に浸透しているとまでは言えない。まずは助け合いの雰囲気や文化を意識的に作っていききたい。その先に雇用という形が見えてくれば」と言います。

2022年度から県で実施を検討されている「障害者ピアサポート研修事業」や「プロジェクトpeer」の活動(2017年から奈良県が社会福祉法人「萌」に委託している『奈良県精神障害者地域移行支援事業』)の中で行なっている。2020年4月号参照)など、「ピア」の力を活かそうとする取り組みが、県下でも進められています。(六十谷尚美)

▶ 訪問先へ向かう田村さん(左)と井澤さん



News

授産品販売開始！

ニューヤマザキデイリーストア 奈良市役所店

奈良市役所の地下1階にある『ニューヤマザキデイリーストア 奈良市役所店』で、令和3年11月から市内にある障がい福祉事業所が作った授産品が販売されています。店内に入ってすぐの商品棚のワンコーナーにパンやケーキ、クッキーなどの授産

品が陳列され、納品事業所は1週間ごとに入れ替わります。

きっかけは庁舎内で授産品販売されていることに興味を持っていたデイリーストアの店長さんから市障がい福祉課に「授産品販売のために店舗を活

用できないか？」と提案があったことです。販売方法や仕組みづくりは、『奈良市自立支援協議会 就労支援グループ 福祉就労チーム』※が中心となって検討してきました。現在は授産品を納品している15事業所で運営会議を開き、販売を通じての課題の整理や今後のことなどについて話し合っています。

立ち上げ当初から関わっている『青葉仁会』の井西正義さんは「コロナ禍で販売機会を失っている事業所が多くあり、ありがたい機会をいただいた。今回の販売を通して、一般的な市場に対する働きかけを考えるきっかけになり、結果、工賃向上や地域での役割の獲得につなげていけたら」と話します。

(宮崎涼真)

※『奈良市自立支援協議会 就労支援グループ 福祉就労チーム』：市内の就労継続支援B型事業所を中心に構成され、工賃向上や地域の中での役割を持つことをテーマに活動している。



▶ ぼすとのクッキーも販売しています！

Reports

『ともに働く事業所』を作っていくために

ゆいの会の「一般専門職員研修」が令和3年12月27日(月)にありました。ゆいの会では、福祉専門職以外でメンバーと一緒に調理や配達など事業所の活動に携わっている職員のことを「一般専門職員」としています。

当日は就労継続支援B型(以下、B型)こもれび6人、ぼすと1人、きらく舎からはZoomで1人の参加がありました。(きらく6人は後日録画視聴。)

研修の目的は、「法人理念やB型の位置づけ、事業目的を伝えること」。また、一般専門職員のほとんどが調理に携わっているため、「調理技術や食中毒防止のための衛生研修」です。B型こもれびのスタッフ梅本育子さん、吉崎尚子さん、北垣滋子さんが、メンバーと活動する上で大切にしたいことや大量調理のポイントについて話しました。

《役割が保証されている場所》

B型に通所するメンバーの利用目的は様々ですが、事業所が「来たら何か役割がある場所」であることを大切にしています。

授産活動は納期や時間の制限があるため、スタッフだけで進めてしまうこともあります。常に“一緒に働く”場所であることを意識する必要があります。

《作業を組み立てる上で必要なこと》

事業所での調理は、作る量も食品の扱い方も自宅での調理とは違います。限られた時間の中で大量調理を行なうため、「調理(製菓)スタッフだけでなく、メンバーも福祉専門職も巻き込んで仕事をすること」が必要になります。調理スタッフは全体を見て調理の段取りをし、福祉専門職はメンバーの特性や状態を踏まえてメンバーの座る位置を決めたり、役割分担をしたりします。

参加者からは「メンバーが作業に入ってくれた時は、一緒に仕事をするという意識でいるので、作業の前後など、他の場面での対応は福祉専門職にお願いしたい」「専門的なことは分からないが、一緒に良い活動ができればと思う」という意見や感想がありました。

(糀谷優)